

本誌は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、(一社)教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」にのっとり配布しております。

特集

今、文学を学ぶということ

巻頭
エッセイ

言葉には世界がある
マライ・メントライン

新連載

筆跡で読む
古典作品

ブック
ガイド

「書くこと」の
授業をつくる本

平成31年度用教科書訂正箇所

国語教育相談室

中学校

no.

87

光村図書

すごい？やばい？超？鬼？

早稲田大学教授 森山卓郎

先日、学生たちと印度料理店にカレーを食べに行った。学生の反応は、程度表現のオンパレードだった。「やばい辛い」「超辛い」「めっちゃ辛い」「マジ辛い」「鬼辛い」など、いろいろあるでは、一番辛いのってどれ？

そこで、程度対決のアンケート調査をした（6月、私の授業の受講学生68人が対象。数字は煩瑣なのでパーセントで示す）。まず「めっちゃ辛い」対「めっちゃくちゃ辛い」では、「めっちゃくちゃ」の方が高程度という回答が多かった（79%）。本来の長い形の方が高程度だ。「めっちゃくちゃ勉強した」子の方が「めっちゃ勉強した」子よりも頑張っていることになる。あ、「めっちゃくちゃ勉強」だとだめですね。

よりも身に迫る点で程度が高いのだろう。「すごい」も本来は「ぞっとする」感じというときりの程度表現だったが、もはや「やばい」に負けてしまった感がある。追加調査（80人）で「超」と「やばい」を比べたが、面白いことに各々44%ずつの引き分けだった（同じ10%）。

では、「鬼」対「超」はどうか。結果は94%が「鬼辛い」の方が辛いということだった。「鬼」は「超」を超えている。追加で、「鬼」と「やばい」も比べたが、やはり89%が「鬼」の方が「やばい」よりも辛いと答えた。「鬼」って、マジやばそう！

文法的な使い分けも見た。「マジ辛い」と「マジで辛い」では、どちらが辛いでしよう。82%が「マジで」の方が辛いとの回答だった。「マジで」の方が本来的な形だが、より真実味があるのだろうか。前述の、本来的な「め

っちゃくちゃ」の方が程度が高かったのとも通ずる。ただ、「すごく辛い」対「すごい辛い」では微妙で、より辛いとして本来の形容詞連用形の「すごく辛い」を選んだのは29%だった。「すごい辛い」の22%よりも特別多いわけではない。どちらもすぐくはあるのだが。

しかし、「やばい辛い」は別格。本来形容詞だったはずなのに、そもそも「やばく辛い」とはあまり言わない（言えるとしたのはわずか7%）。構文意識として、「やばい。辛い」のように終止形で言い終わる構造だと意識する者すら38%あった。「やばい」は、もはや、ただの形容詞ではなくなっている。

さて、皆が辛さに悲鳴を上げる中、私は「そんなに辛いかな？」などと落ち着きはらってカレーを賞味した。以前一人「超絶鬼辛い」のに挑戦してすっかり怖気づいていたおじさんは、しっかり甘口を注文していたのだった。

CONTENTS

探検！言葉の森 36 すごい？やばい？超？鬼？ ————— 森山卓郎

巻頭エッセイ 言葉と向き合う 02 言葉には世界がある ————— マライ・メントライン

特集 04 今、文学を学ぶということ

文学の力 文学で培う健全な批判精神 ————— 中野信子
文学は“稼ぐ力”の源 ————— 藤野英人
「わかりにくさ」で会話をしたい ————— 最果タヒ
人工知能と文学 ————— 松原 仁
統計的に正しくない選択をするということ。 — 鹿島 茂

社会人200人にきく 覚えてますか？ 文学の授業

実践者の言葉 一人と一人をつなぐ文学の授業 ————— 数井千春
生きる真実と出会う場 ————— 川口 寛
日常生活に生きる読みを ————— 白木 圭
他者との討論で読む ————— 山本雅博

筆跡で読む 古典作品 1 16 平仮名の成立と和歌の流行 ————— 島谷弘幸

18 平成31年度用教科書 訂正箇所のお知らせ

授業に役立つブックガイド 3 20 「書くこと」の授業をつくる本 ————— 渡辺光輝

言葉には 世界がある

ドイツ人、マライ・メントライン

日本語を勉強し始めたのは十五歳の頃。ドイツの北の果てに位置する地方都市キール市内の中学校の教室で、大人ばかりのグループに交じり、市民大学が提供する「日本語初級」のクラスに参加した。理由は割と単純で、子供の時から強い興味を抱いていた日本にいずれ行きたいという夢を持っていたので、その夢がかなった時、日本人と会話するために日本語が必要不可欠だから。言い換えれば、日本語さえできれば日本に行ける気がしていた。

教科書の中にあつたのはバブル時代を意識した八〇年代チックなイラストに、ビジネス会話のために日本を訪れるドイツ人男性のストーリーだった。また、ひらがな・カタカナすら教科書に登場しない初級の授業だったにも関わらず、いきなり「りんごはシュミットさんによって食べられる」と、「受身」用法が口頭で説明されるような、今思えば滅茶苦茶な授業だった。

一九九九年、夏の残暑で息苦しい地方

的な結果」と「残念な人」でドイツ語訳が違ってくる。しかも後者に關しては「同情に値する人」と少し歩み寄りながら訳すか、「人間失格」と強く突き放した感じで訳すかは、状況と話し手によって違うかもしれない。つまり、日本語の「残念」を使用する時に、その表現が使える「意味の範囲」があつて、それにピッタリ当てはまる、全く同じ範囲のドイツ語がないということ。

単語一つ一つに世界が存在する。まるで生き物のようだ。単語にはその生成過程と成長過程で吸収された地理性、社会性、文化性、時代性が大いに含まれているが、それだけではない。単語はそれぞれ色、響き、サイズといった感覚的な性質を持っている。私たちはそこに凝縮された世界観を借りて、様々なモノを定義し、他人に伝えるためのツールとして利用している。

しかし、「全ての現象を表現するための言葉」は一言語の中に用意されていない。それもあるって、母語のドイツ語には全くない表現が日本語の中にあつたりす

場する単語が、旅行者向けの辞書に載っているはずがない。

そうすると、唯一頼りになるのは同級生や担任の先生による必死な英語訳と、自分自身の観察力のみ。言葉ではなくて、その場の雰囲気、みんなの反応、声のトーン。担任の先生がホームルームで真剣そうに連発する「ハンソデ」と「ナガソデ」は、どうも知っている単語「制服」に関する話で、おそらく次の日から秋パターンの登校せよ！という指示だと推測できた。

こうして、ほぼ雰囲気と勝手な想像で日本語を覚えた。時が進み、電子デバイスの恩恵によって知らない単語をすぐに確認できるようになった。これによって、効率よく日本語を学習できると思いきや、意外にもそうではなかった。

言葉には様々な種類のものがあり、「牛」や「お箸」のように、具体的なものを指す単語もあれば、気持ちや概念を指す、少しふわっとした単語もある。例えば、「残念」という単語でも、「残

る。「悔しい」、「言霊」^{ことだま}、「意識高い系」、「女子力」、「モヤモヤ感」、「居場所」、「生きづらさ」などなど。もちろん、ドイツ人も悔しがる時はある。しかし、敢えて悲しみとがっかり感の間にあるその感情を表現するための単語を作つてこなかった。つまり、ドイツ人が悔しがっている時、自分が悔しがっていることを意識していない可能性があるのだ。

その一方、悔しさを一つの感情として意識しているのに、そのための表現がなければ「モヤモヤ感」が残るだけでなく、

マライ・メントライン

1983年シュレースヴィヒ=ホルシュタイン州キール生まれ。独・和翻訳家、TVプロデューサー。小学校時代に訪れた地元の民族博物館での漢字との出会いをきっかけに、日本語にのめり込む。二度の留学を経て日本との「縁」を深め、2008年より日本在住。著書に『ドイツ語エッセイ 笑うときにも真面目なんです』（NHK出版）など。18年10月からテレビ朝日「ワイドスクランブル」にレギュラー出演。活動の幅の広がりから、「職業はドイツ人」を自称している。



とても辛いものがある。日本語のように様々な感情を細かく定義し、表現することが自分の母語のドイツ語でできないため、私は無意識的に「生きづらさ」を感じていたと思う。様々な言葉を知ることによって、目の前の世界も、内面の世界も、言語化し、再構築できるようになった。言語の勉強というのは、テストで点数を稼ぐためのものでもなければ、【意識高い系】が趣味でやるものでもない。母語であっても、外国語であっても、新しい概念を知ることによって世界が少しずつ広くなる効果があると思う。

ちなみに、ドイツ語にも日本語にない表現がある。その一つは「Ferienweh」^{フェレンツェー}。今は「旅行に出掛けたい！」、つまり旅心という意味合いで使われることも多いが、本来の意味はホームシックの反対。今の場所は居心地が悪く、当てもなくどこか別の場所に行きたい気分。【居場所】探しの一種かもしれない。私が居場所を日本語の中で見つけたように、そんな居場所を言葉の世界で見つけられたら、素敵だと思う。

今、文学を学ぶということ

実社会に生きる資質・能力が求められるようになっていく現代、教室で文学を学ぶ価値とは、どんなところにあるのでしょうか。

文学を愛し、各界で活躍される五人の方のエッセイ、四人の実践者の先生方の言葉を通して、文学の価値、私たちの人生との関わりについて考えます。

文学で培う健全な批判精神

脳科学者 中野信子

現実とはまったく違うストーリーを仕立てあげて偽装し、犯人が事件を起こす。刑事はそのストーリーを信じ込み、別の人間に疑いの目を向ける——推理小説の多くは、伏線やミスリードを使って構成され、読者は自ら推理をしたり、それが裏切られたりすることを楽しむ。この営みには、人間が物事を認知するときの「ゲシュタルト知覚」という特性が関与している。

例えば、次のような記号が紙に描かれていたとする。黒丸が横並びに二つと、その下にU字型の円弧が一つ。多くの人はこれを見て、即座に「顔」を連想するだろう。しかし、これは顔ではなく、ただの記号の集まりだ。にもかかわらず、人はそれを全体として捉え、顔だと認識してしまう。この認知のしかたが、ゲシュタルト知覚である。私たちの脳は、「物語」を勝手に作り出してしまうのだ。

少ない情報をもとに、より多くの情報を簡単に処理するために、ゲシュタルト知覚

は効率的かつ必要なものである。しかし一方で、この機能は、人の思い込みや錯誤を招き、誰かの嘘に惑わされるという危うさをも併せもっている。これを回避すべく、私たちの脳に備わっているのが、共感・想像・良心・抑制・長期的な展望などの思考をつかさどる「前頭葉」の働きだ。ただ、前頭葉は発達に時間がかかり、その機能は、小学校高学年ぐらいから、三十歳ごろまでかけてようやく完成する。

前頭葉が発達していく時期には、その発達を促すような働きかけを行うことが肝要となる。その働きかけとはすなわち、多様な人々に共感したり、他者の心情を読み取ったり、意図を読み取ったりするなどということだ。文学とは、言語によって伝えられた人の思考の、解釈のしかたについての議論を交わす領域である。つまり文学こそ、まさに、前頭葉を鍛えるために大きな役割を果たす実学なのだ。

好きな小説の外伝を書くのもいい。読む

ことに苦手意識があるなら、アニメや漫画のノベライズを読むというだけでもいい。前頭葉が未発達な中学校時代には、文字情報から意味を構築する経験を大いに重ねることが重要だ。そして、ゲシュタルト知覚のみにとらわれず、前頭葉を働かせて、この世界には虚構というものがあること、現実には幾通りもの解釈がありうるということを理解してほしい。その積み重ねによって、これからの社会をつくる子どもたちには、ぜひ、健全な批判精神を培ってもらいたい。(談)



1975年、東京都生まれ。医学博士。東日本国際大学教授、横浜市立大学客員准教授。東京大学工学部卒業後、同大学院医学系研究科脳神経医学専攻博士課程修了。脳や心理学をテーマに研究や執筆の活動を精力的に行う。「脳はどこまでコントロールできるか?」(ベストセラーズ)など著書多数。

文学は「稼ぐ力」の源

投資家 藤野英人

十代の頃からたくさんの文学に触れる体験は、人生をどこまでも豊かにしてくれる——。子どもの頃に大量の本を読み、大人になってからは投資家として「人を見極める」経験を重ねてきた私は、そう強く確信しています。

きっかけは小学三年生の頃、教育熱心だった両親が「課題図書」として私に与えた200冊の本でした。専門家のお薦めという古今東西の名作が突如積まれ、「感想文を書かなければ食事は出さない」というやや乱暴な方法で、私は強制的に文学の世界へ足を踏み入れたのです。

シェイクスピア、トルストイ、マーク・トウェイン、志賀直哉、森鷗外。小学生には早すぎる本を、お腹を満たすために無理やり読んでいましたが、200冊を何往復かするうちに、だんだんとその世界に引き込まれていきました。

特に好きだったのは井上靖の『あすなろ物語』。新聞記者のライバルどうしが筆を

闘わせる描写を読みながら、「大人はこんなにカッコいい世界を生きているんだ」とワクワクしたのを覚えています。

時には運命の恋人に出会う青年になり、時には百万の軍隊を破る名将となり、時には浮気性の旦那に苛立つ妻になり。人生経験などない十代そこそこの私が、文学を通じて濃い人生を追体験していました（相当、ませた子どもだったはずです）。

文学で描かれるのは人間そのもの。決してキレイには割り切れない、矛盾した感情の複雑性や両面性を垣間見ることに、「人を複眼的に見て、寄り添える力」が養われたように思います。

「人に優しくありなさい」と教育するためには、ただその言葉を繰り返すのではおそらく足りない。さまざまな立場の人間の背景や内面を知る体験が不可欠だと私は思います。文学はその役割を担うはずです。物語という、心躍らせる引力に乗せて。

そして、文学によって磨かれる「共感

力」は、そのまま「稼ぐ力」と直結します。

なぜなら、世の中のビジネスというものはすべて、人が心から求めるものを満たすことで成り立つからです。世界の名だたる企業の経営者の多くが読書家であり、独自の哲学を語る教養を身につけていることも、それを証明しています。

教室で文学に出会う体験は、世界を無限に広げる入り口。せっかく同じ作品を皆で読むのですから、何をおもしろいと感じたか、ぜひ語り合ってほしいと思います。そこに正解は決してなく、感性の違いを認め合える時間こそが尊い学びになるでしょう。



1966年、富山県生まれ。レオス・キャピタルワークス株式会社代表取締役社長。早稲田大学卒業後、国内外の資産運用会社勤務を経て、2003年同社創業。投資に値する会社かどうかを判断するため、23年間で約5700人の社長を取材。著書に『投資家が「お金」よりも大切にしていること』（講談社）など。

「わかりにくさ」で会話をしたい

詩人・小説家 最果タヒ

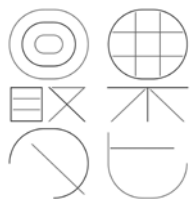
うまく説明せよ、と言われる。思ったことについて、考えていることについて。きちんと説明し、私を納得させなさい、と言われる。会話とは、そういうことの繰り返しであるように学生時代は思っていた。コミュニケーションをうまくとりなさい、協調性をもちなさい。けれど、なぜ私が思ったこと、考えたことを、他者に納得してもらわなくてはいけないのだろうか？ そう思ってしまったことはどうやったつもりで変わらぬのに、言葉を尽くして、わかりやすくせよと言われる。わかりやすくしなければ、納得してもらわなければ、私の感情はなかったものとして話を進められてしまう。十代の頃、私はそういう危機感に、言葉で対抗しようとしていた。

あのころ、ブログを書きつづけていた。それはまったくわかりやすくはなかった。支離滅裂だったし、直感的で、納得なんてされないものだ。けれど単純な言葉に当てはめて、言えたような気になって、曖昧だ

けれど自分だけの感性で感じていた部分を忘れていつてしまうよりは、言葉でその曖昧さを曖昧さのまま書いてしまいたかった。それを試み続けたかった。どんなに「わかりにくい」とか「意味がわからない」と言われても、「私はあなたではないので意味がわからなくて当然では？」という気持ちになる。なぜ人は他人を「理解できる」と思い込んでいるのだろう。理解できなかったとき、「相手の努力が足りない」とどうして思うことができるのだろう？ 違う人生を生き、自分が見てこなかったものを見てきた人のことを、理解できるわけもないし、だからこそ会話をしたいと思うのではないの？ 私は、よくわからないことを言う人たちに、「君の話はよくわからない」とって言いたかったし、私もそう言われたかった。それでも相手の話を聞いていたかったし、自分も話していたかった。だから、私はブログを書いてきたのかもしれない。それは後々「詩」と言われるようになり、雑

誌に投稿したり本を出すことで、私は結果として今、詩人として働いている。

きつと今でも、自分の作品が「わからない」と言う人の方が大多数だと思っています。「わかった」と言う人も、私の思うままに受け止めたのではなくて、その人が思っていたことをその中に見つけ出したのだと思っています。そしてそれは、私が夢見ていたひとつの「会話」なのだと思う。言わずにいた、わかりにくくて、とりとめもなく、曖昧な、でもその人だけの気持ちで、私の詩によって引き出されていくのだとしたら、そんな幸せなことではない。私にとっではそれが、詩を書き続ける理由です。



1986年生まれ。2004年、インターネット上で詩作を開始。08年、第一詩集『グッドモーニング』（思潮社）で中原中也賞、15年、詩集『死んでしまう系のぼくら』（リトルモア）で現代詩花椿賞受賞。最新詩集『天国と、とてつもない暇』（小学館）、小説集『十代に共感する奴はみんな嘘つき』（文藝春秋）など著書多数。

人工知能と文学

公立はこだて未来大学教授 松原 仁

思い出してみると、物心ついたときから本を見る、あるいは読むのが大好きだった。母親が本好きだった影響が大きいと思う。小さい頃は毎日寝る前に読み聞かせをしてくれた。本を買うと言えば決まったお小遣いとは別に代金をもらえたのは、子どもを本好きにしようという母親の作戦だったのであろう。その作戦にまんまとはまっただけであらう。その以外に毎年300冊以上の本を読むことが10代から40代まで30年以上は続いていた。当時の一般的な母親とは異なり漫画を読むことも認めてもらっていたので、子どもの頃から漫画もたくさん読んでいた。

好きなジャンルというのはなく、まさに乱読であった。基準はただ一つ、読んでおもしろいことである。推理小説、SF小説、純文学、歴史小説などなんでも読んだ。中学生から高校生の時代に、好きな作家は夏目漱石、星新一、筒井康隆、小松左京、カミュ、庄司薫、遠藤周作、北杜夫、ドイル、

クイーン、クラークなど数えきれないほどいた(当時かぶれていたフロイトの著作も文学として読んでいた)。その当時の癖は、1冊の本を最後まで読んで次の本に進むのではなく、同時にいくつかの本を少しずつ読み進めるというものである。

幼稚園児のときに「鉄腕アトム」のアニメを見て人間のようなロボットを作る技術者に憧れ(育ての親のお茶の水博士よりもアトムを作った天馬博士のほうが好きだった)、人工知能研究者という今の仕事に至っている。人工知能はコンピュータに人間のような知能をもたせることを目標としている。研究が始まった当初はもっと簡単にコンピュータは人間に追いつき追い越せると思っていたのだが、研究が進むにつれて、人間は偉大な能力をもっていてなかなか追いつけないことがわかってきたという経緯がある。

人工知能を研究するには目標である人間というものをよく知ることが必要である。

人工知能はコンピュータ科学の一部としていわゆる理科系に分類されるが、人間を研究対象としてすることで多分に文科系の要素がある。人間を知るために、文学が大好きであることはとても役に立っていると思う。例えば、人間はもっぱら理屈ではなく感情で動くのだということを文学は教えてくれた。好き嫌いで物事を判断するのは非論理的ではあるものの、人間のもつとても優れた能力なのである。これからおもしろい文学を読み続けて人間というものを少しでもよく知りたい。



1959年、東京都生まれ。東京大学理学部情報科学科卒業。86年、同大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。通産省工業技術院電子技術総合研究所(現産業技術総合研究所)を経て、2000年より現職。専門は人工知能、ゲーム情報学。著書に『AIに心は宿るのか』(集英社インターナショナル)など。

統計的に正しくない選択をするという事。

フランス文学者 鹿島 茂

私たちが普遍的だと思っていたものの多くは近代の「発明品」にすぎず、ワープロがパソコンに、パソコンがスマホに置き換えられたように、近代が終われば、その「発明品」も新しい発明品に取って代わられる運命にあるようだ。たとえば、学校制度というものも、十八世紀から十九世紀にかけて成立した国民国家の理念による「発明品」である以上、国民国家が成立しなくなれば、アマゾンやグーグルなどのAI先生が学校の先生に代わって、グローバルに子供たちを教えるという日が来ないでもない。

ではAI先生は教科書にどんな教材を選ぶだろうか? 「統計的に正しい」と判断した教材を選ぶに違いない。その場合、教材に「文学」は入ってくるのだろうか? 採用されることはないだろう。「文学」をAIが「統計的に正しい」と判断することはありませんからである。裏返せば、これまでの教科書に「文学」が取り入れられていたということは、「統計的に正しくない

選択」をしてきたということになる。

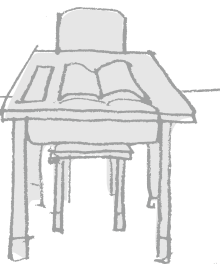
で「統計的には正しくない選択」であった「文学」を教科書で読まれた生徒たちは、その「誤った選択」をどう感じたのだろうか? まず、九十九パーセントの生徒は「なんだかわからなくて、つまんなかった」と答えるだろう。それが「統計的にも正しい」答えなのだから、当然である。しかし、不思議なもので、残り一パーセントの生徒の中には、それまで家庭環境により一度も「文学」などにふれることがなかったにもかかわらず、中学校の国語の教科書で読んだ高村光太郎の「冬が来た」や北原白秋の「落葉松」、あるいは丸山薫の「汽車に乗って」や田中冬二「ふるさとにて」などの詩によって、にわかに「文学」に目覚めてしまった(たとえば私のような)者も皆無とはいえないのである。

AIは、こうした「統計的には正しくない選択」が生み出す「エラー的」な生徒についてどのように判断を下すのだろうか?



1949年、神奈川県生まれ。明治大学国際日本学部教授。東京大学仏文科卒業後、同大学院人文科学研究科博士課程単位習得満期退学。『職業別バリ風俗』で読売文学賞受賞。活字メディアに発表された書評を無料で閲覧できるサイト「ALL REVIEWS」を主宰。Twitter: @_kashimashigeru

少なくとも、一定程度のエラーが含まれるようなシステムの方がより健全であると判断を下すようなことは絶対にあるまい。AIはまだそのような総合的な判断ができるほど賢くはなっていないからである。このような意味あいにおいて、「統計的には正しくない選択」をあえて行うことのできる人間の頭脳というのは実に偉大であり、国語の教科書に「文学」が採用されている限り、世界はまだ安泰だといえる。逆にいえば、教科書から「文学」が追放されたその日、世界は終わりを迎えるのである。

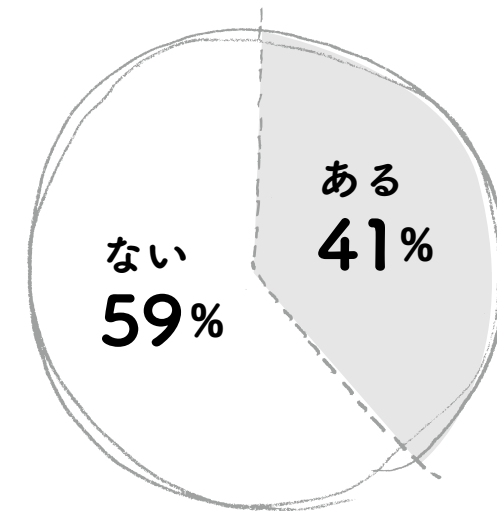


社会人 200 人にきく

覚えてますか？ 文学の授業

現在、社会で活躍する人々は、文学にどのような思いを抱いているのでしょうか。広く一般の社会人 200 人を対象に、中学校時代の文学の授業の記憶、今の自分と文学との関わりについてききました。

Q1 中学校の国語の文学の授業で、記憶に残っていることはある？



〈「ある」と答えた人の記述から〉

- ・「文学に正解などない、感じ方や考え方は自由だ」と教えてくれた恩師は今でも覚えていて感謝している。
- ・生きていくうえで役立つことを学んだと思った。
- ・知っている話でも詳しく読むことで、自分の考えが変わって、はっとした。
- ・小説本のキャッチコピーを考える授業が楽しかった。
- ・受験に合わせたテクニックのみを教わった。
- ・情緒的すぎて辟易した。
- ・深く読んでみたい作品には出会えなかった。
- ・自分にとって知識や見識を与えることが全くなく、何の役にも立たなかった。

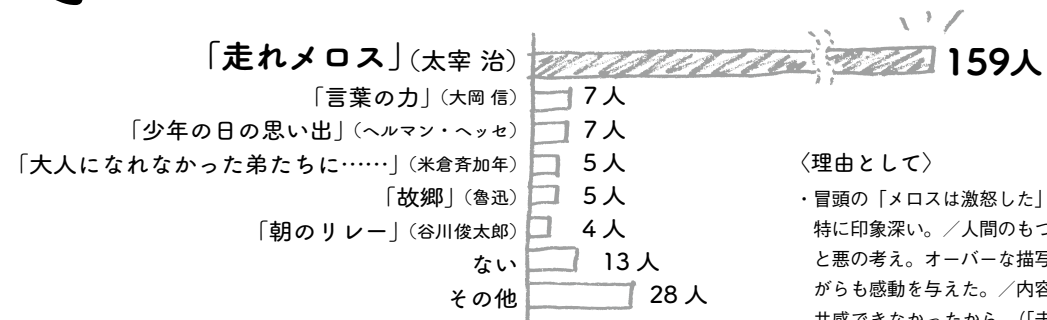
「授業の記憶がない」と答えた人は半数以上。

「記憶がある」と答えた人の中には、「好きではなかった」「つまらなかった」といった記憶をもつ人も。よい記憶を挙げた人は、先生や授業のしかたが特に印象に残っているようだ。

〈調査について〉
●対象：全国に住む 30～50 代の男女 200 人
●方法：ウェブアンケート
●時期：2018 年 7 月

Q2 印象に残っている文学作品（物語・小説・随筆・詩）は？

※複数回答あり。



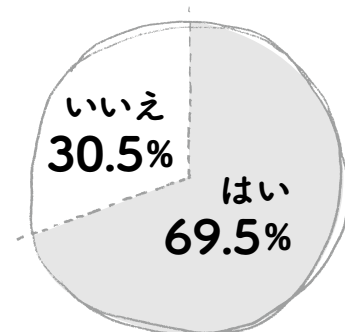
〈理由として〉

- ・冒頭の「メロスは激怒した」が特に印象深い。／人間のもつ善と悪の考え。オーバーな描写ながらも感動を与えた。／内容に共感できなかったから。(「走れメロス」)
- ・それまで言葉について意識していなかったから。(「言葉の力」)
- ・切ない思いを抱いた。(「少年の日の思い出」)
- ・風景が目につかぶよう。(「朝のリレー」)

「走れメロス」が 1 位。
「その他」には、教科書に掲載されていない作品も。

「走れメロス」が、同じように教科書に長く掲載されてきた「少年の日の思い出」「故郷」に比べて圧倒的に多数だったのは、やはり作品のインパクトによるところが大きいといえる。「その他」は、「オッセルと象」(宮沢賢治)、「羅生門」(芥川龍之介)など。

Q3 社会人として生きるうえで、文学は役に立つ？



〈「はい」と答えた人の記述から〉

- ・ものの考え方に少なからず影響があると思う。
- ・社会人としての一般教養。
- ・自分が一生経験できないことを疑似体験できる。
- ・現実にかかる問題の解決方法が文学にはある。
- ・他人を理解するためには文学を読まないと。
- ・読解力はいろいろな思考に必要。

〈「いいえ」と答えた人の記述から〉

- ・役に立つかどうかよりも、楽しみでよいのでは。
- ・お金にならない。
- ・本を読まないが、現在、支障はないから。
- ・現実世界での体験のほうがはるかに役立った。

約 7 割の人が「役に立つ」と回答。
人間理解、ものの見方・考え方への影響を挙げる人も。

「人への共感力が高まる」「会話の際の話題の一つになる」など人間理解・関係づくりに役立つという声、「視野が広がる」などものの見方・考え方に役立つという声、「人生のヒントがある」など生き方を考えるうえで役立つという声が目立った。

一人と一人をつなぐ文学の授業

東京学芸大学附属小金井中学校教諭

数井千春

五月、まだ人間関係が不安定な一年生の教室で一編の物語を読んだ。同じ中学一年生の日常を描いた作品である。まずは作品を一読し、一人一人、自分が良いと思ったところを説明する短い文章を書いた。この作品を気に入った生徒ばかりでなく、「おもしろくない」ときっぱり言う子も「よくわからない話だ」と言う子もいる。確かに派手な展開はなく、主人公も格好いいタイプではない。結末もはっきりしない。「さまざまな感想があると思うけれど、何かしら良いところを見つけて説明してね。この人物は好き、この言葉の使い方は良いな、このせりふにぐつときた。心情の描き方で印象に残ったところ。この情景描写がすてきだ。テーマや主題について書くのもいいですね。」

自分が見つけた良さを説明する文章を全員が書き上げ、それを印刷して、みんなで

読み合った。自分は読み流した言葉に意外な良さを見いだす友人、気に留めなかった登場人物が好きだと熱く語る友人、さりげない表現に着目してテーマを読み取る友人。自分とは異なるさまざまな読み方に驚き、本文を読み返し、確かにそうだと納得しながら、物語を読み深めていった。一人で読んでもおもしろいけれど、みんなで読むともっとおもしろい。一つ一つの良さが積み重なり、作品全体の良さがじわじわと感じられる。そんな時間であった。

文学作品では一人一人が独自の発見をすることが出来る。教室にそれぞれの発見が集まると、不思議なことに、それを認め合い学び合う空気が自然と生まれてくる。テストの点数に表れるような優越感も劣等感も生じない。友達の見方に関心したり共感したりしながら、みんなが作品の世界を味わう。教室にリラックスした穏やかな時

間が流れていく。生徒たちは作品について語りながら自分の価値観を語り、作品の良さに出会いながら友達の意外な一面に出会う。初めは「おもしろくない」と頬杖をついていた生徒も、友達の文章と本文に線を引いたり自分の考えを書き込んだりしながら読んでいた。

他者との関係のなかで自立的に読んでいくときに、子どもたちの読む力が育っていると感じる。一人で読み一人で考え、それを他者に向けて表現し共に考え、また一人で読む。他者に語ることにやりがいを感じ、他者と共に学ぶことに価値を見いだし、さらに自分の日々の生活につながっていくような授業、人と人がつながることで自分の生き方を見つめるような文学の授業を、これからも目指していきたい。

生きる真実と出会う場

山口県美祢市立福中学校教諭 川口 寛

文学の授業さえなければどんなに楽しくと思わなかった国語教師はいないだろう。いつそハウツー本でネタを探そうか？

国語教師は今日も葛藤しつつ、あてどなさ、そろそろしき、畏れを胸に、教室に向かう。「高瀬舟」を一読後、教室の空気は一変する。重い何かを無理矢理に呑み込まされたような顔で、生徒はインクのしみから何を受け取っているのか。「お奉行様にきいてみたくてならなかった」羽田庄兵衛と同じまなざしで。その前でどんなノウハウが役に立とうか。ただ一つ、目を凝らし口を噤み「言葉」に耳を澄ますことの他に。

文学とは特殊な一回性に生きる「人」による、安穩と生きる「私」への揺るがしと問いかけである。二度と回帰しない、二人として同じでない生きた「言葉」が、逆説的にそれぞれの「私」を結び付ける。

「少年の日の思い出」などではない、今も美と正義の間に喘ぐ心の疼きに寄り添

う。帰省こそ一番の「盆土産」なのに、さよなら代わりの「えんぴつフライ」に笑った後、切なさききるとつばやく。「メロス」を半ば馬鹿にし、半ば感動し照れる自分に赤面する。生徒は別世界に没入し、微かな違和に感心し、真正な問いかけに沈黙し、全生活経験をかけて応える。インクのしみは情感を湛えて受肉し、教室を揺るがす。国語教師は文学と生徒が切り結ぶ場となる「問い」を胸に、ここぞと発する瞬間をうかがう。

かくて「金持ちなのか貧乏なのか？」の問いは無意識の欺瞞を、「なぜ大じらしの説明を？」の対話が社会の桎梏を、「どき」と「どきつ」のたった一字の差異がわずかな残る「希望」のありようを浮き彫りにする。「故郷」を離れる語り手の臉の裏に浮かぶ「月下の道」は、もはや生徒にとって遠い世界の他人事でない。中学生という軌の下で今を生きる「私」それぞれの表象として、

確かな輪郭で照らし出されている。

もし独りでそんな言語体験が可能なら「文学の授業」などいらない。国語教師が与えられる偶像是何もない。生徒は頭でこしらえられた万遍ない正解など求めていない。生きる真実との出会いを求めている。

文学こそ実学である。個々の「私」が現実ここに生きる真剣勝負。魂とのやりとり。一期一会の「場」。国語教師はおしゃべり人形を造りたいのではない。真率な「言葉」に揺さぶられ、言葉の奥に「人」を感じ、共に生きる「私」を育てたい、その微かな「希望」——否。大いなる「志」を胸底に、今日も国語教師は文学を授業する教室への「道」を歩んでゆく。独りでないと信じて。



日常生活に生きる読みを

愛知県春日井市立尾東中学校教諭 白木 圭

私が文学の授業で目ざしているのは、文学的な文章（ここでは特に小説を念頭に置いている）の読み方を子どもたちに身につけさせることである。説明的な文章と同様に、文学にも基本的な読み方があると私は考える。そして、その型を身につけることができる、文学をより深く、豊かに読むことができると考えている。

ここで私が言っている文学の読み方とは特別なことではない。簡単に言えば、教科書巻末折込の「文学的な文章を読むために」に挙げられている観点、「語り手」「構成」「場面」「登場人物の設定」「登場人物の心情」について意識しながら作品を読み、一つ一つ丁寧に捉えていくことである。ただし、授業で教える際には、それらの観点を意識して読んだことで、「文学の読みが変わった」「新しいものが見えてきた」と子どもたちが実感できなければならぬ。そのため、説明や発問のタイミングを考え

たり、文章の中から適切な箇所を探したり、子どもどうしで読みの交流をさせたり、短い物語の創作をさせたりするなど、さまざまな手立てを考えて取り入れている。

しかし、私が何より大切にしているのは、学習した基本的な読み方について振り返る時間を、文学の単元ごとにしつかり取ることである。そして、同じ読み方で、どの文学作品の読みも深められることを、子どもたちに実感させていくことである。これをしてしまうと、せっかく身につけた読み方が、特定の文学作品に対してしか通用しないものだと子どもたちが思ってしまう、その後の読書生活を豊かにすることにつながるようになってしまうからだ。

桑原武夫は『文学入門』（岩波書店）の中で次のように言っている。
「人生はあくまで合理的に生きられねばならないが、人生を充実した、よりよきものとするためには、理性と知識のみでは足り



他者との討論で読む

北海道小樽市立向陽中学校教諭 山本雅博

勇氣、挑戦する心、夢を描くこと、諦めない心、多様な考えの他者と共に生きていく力。その土台をつくるのが文学の授業だ。文学は生活で利益につながらない、それは短絡的だ。文学の授業で学んだ思考力、培った感性や情緒、心の強さが人生の基礎力となるのだ。物語の基本型は「ゆきてかえりし」だ。人生一度だが、読んだだけそれを追体験できる。

授業は音読指導から始める。全員が、声に出してすらすら読めるようにする。

次に設定を扱う。登場人物・場所・時間など。設定を問うだけでアクティブ・ラーニングの授業、討論の授業になる教材もある。例えば、二年「字のない葉書」（向田邦子）の授業。発問「一つのお話ですか」。指示1「ノートに書きなさい」。指示2「お隣と話し合いなさい」。続けて、教室全体で発表し合う。意見が一つではないと、生徒はわかる。私は、教師が指名をせず生徒が

次々に立つて発表する「指名なし発表」の方法を四月から続ける。生徒に、主体的に授業に関わらせたいからだ。

場所を問う発問、人物の関係図作成によって討論を重ねていく。その後、発問「中心人物は誰ですか」。主発問である。「父」派「末の妹」派、「私」派に分かれる。「私」派がない年もある。中心人物の検討をしつつ主題に迫る。

討論の前には指導の工夫が必要だ。生徒全員のノートを見て丸を付ける。これは、自分の考えと理由を書いたという丸だ。書けない生徒は前に集めて考えを引き出したうえで、「それを書けば良いのですよ」と言って、ノートに書かせる。討論も、教師が指名しない「指名なし討論」だ。生徒だけで討論を進められるようになるには、指導技術と教師の授業力を必要とする。

討論後、作品の主題について自分の考えを書かせる。授業では答えを一つに決めず、

オープンエンドにする。それぞれ考える主題は違って良い。大切なのは自分の考えをもち、言葉にできること。他の人に伝え、話し合えることだ。そこには、物語に描かれた人生の追体験がある。上記の発問でそれぞれ一時間の授業になる。

文学を読む視点（イメージ、登場人物、人物関係、作品の構成、事件、キーワード、題材、モチーフなど）を教え、討論する授業。それは、言葉にこたわって読み考える、創造的・論理的思考と、他者とのコミュニケーションの力の伸張が期待される。文学の授業は、行動の源となる感情、感性、情緒を磨く。今後ますます必要になるろう。



1 平仮名の成立と和歌の流行

新しい学習指導要領では、日本の文字文化の豊かさを理解することが、これまで以上に求められています。従来、国語では主に言葉という側面から意味に迫ってきた古典作品を、文字文化という切り口から取り上げて解説していきます。



九州国立博物館長
しま たに ひろ ゆき
島谷弘幸

1953年岡山県高梁市生まれ。東京教育大学卒。小松茂美博士に師事。東京国立博物館副館長を経て、2015年から九州国立博物館長。文部科学省教科用図書検定調査審議会委員(08～17年度)など歴任。

現在、学校ではともかく、社会において文章を作る場合には、ワープロ、パソコンが大半であることは否めない。それにも関わらず、書写における文字感覚の育成が欠かせないのは何故であろうか。

その答えの一つとして、日本語の成り立ちや日本独自のジャパニーズアルファベットというべき仮名が作られるに至った過程を考えると自明であろう。今日いう平仮名は女手とよばれ、草書体の仮名をさらに大胆に書きくずしたものである。典麗優雅な書体で、文字を連ねて書写する美しい連綿を生み出した。この平仮名の完成は、万葉仮名(『万葉集』の表記に多く使用された表音文字の仮名)、草仮名(草書体の仮名)から女手へと段階

を経る間に、多くの能書がより美しい字体や連綿の追究を続けたことの結果に他ならない。伝統の墨守だけでなく、時代の風潮や個性を生かした文字文化の継承を学ぶことは、新しい学習指導要領にもうたわれているところである。

ところで、日本には独自の文字がなかったため、中国や朝鮮半島から漢字が移入され、同時に書法(書の書き方)も移入された。漢字は、その成立の初めが象形文字であったため、美しい造形を持つている。また、毛筆の発明以後は、その豊かな表現機能もあり、書はたえず美的追究がなされてきた。伝来した漢字及び書法の学習と模倣が日本の書のはじまりで、折々に大陸から新しい書風の刺

激を受けながら展開していった。

やがて、平安時代中期に入ると手本とした大陸の政治や法律は次第に日本の実情にそぐわなくなってきた。このため、新たな役所の創設など、より日本の実情に適するように変貌していった。また、遣唐使の廃止もあり、制度的にも物質的にも大陸からの新たな刺激が少なくなると、日本の風土や国民性に合った日本独自の文化が徐々に萌芽を見せてきた。延喜五(九〇五)年には、醍醐天皇により最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』撰進の勅命が出され、以降は相次いで勅撰和歌集や私家集が成立し、歌合も流行した。この和歌の流行は平仮名の成立なしには考えられない。日本人の好みによ

るもので、車の両輪のごとくに進展していった。

書写教育が必要となる二つ目の答えである。もともと書は平安時代の王朝貴族にとって欠くことのできない教養であり、その巧拙は人々の大きな関心事であった。今日でも、「書は人なり」など、味わい深い文字や丁寧で美しい手書きの文字を

評価する慣習があることも重要であろう。ところで、宮廷貴族は儀式やお祝い事に際して心を尽くした贈り物をするのが通例であった。とくに珍重されたのが、身の回りにおいて鑑賞する調度手本、すなわち古筆であった。この言葉は、本来は古人の筆跡を指す言葉であったが、現在は平安から鎌倉時代までの主として歌集を書写した筆跡をいう。中でも『古今和歌集』は最初の勅撰集として最も重要視され、筆跡の巧みな人によって数多く

書写された。

図1に掲げた「元永本」は、紐で綴じた冊子本で原装のままで伝わり、『古今和歌集』が完全に残っている最古の写本である。これが活字だけで伝わるのとしたり、何と味気ないことであろうか。書と料紙(※)が織り成す美しさは王朝貴族の美意識を反映しており、まさに文学と書と工芸をコラボレーションした作品として極めて貴重である。日本人は千年前の文学を当時の原語のままに学習し、理解することができる稀有な民族なのである。

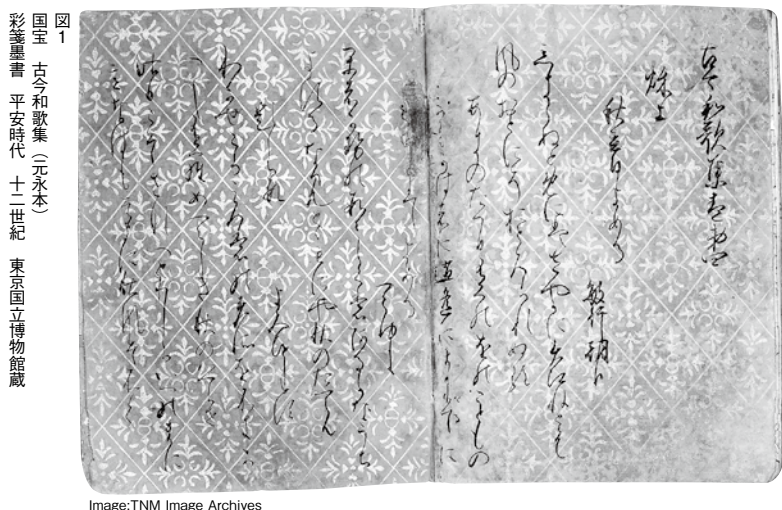


Image:TNM Image Archives

図1 古今和歌集(元永本)
彩色墨書 平安時代 十二世紀 東京国立博物館蔵

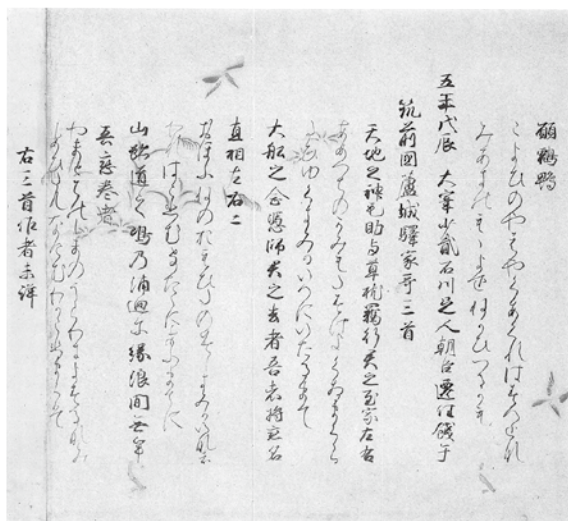


図2 桂本万葉集(伝紀貫之筆)
彩色墨書 本紙 平安時代 十一世紀 宮内庁蔵

これより早く成立した『万葉集』であるが、図2の「桂本万葉集」がある。繊細で優美な金銀泥の下絵を施した美しい料紙に、『万葉集』を書写したものである。字形は偏平であるが、力強くじつくりと紙面に食い込むように運んだ筆線に特徴があり、粘りのあるリズムミカルで極めて個性的な書風である。料紙に合わせて、数文字にわたる息の長い連綿、筆圧の強弱による巧みな変化などは、全体の美しさを意識した、筆者独自の卓越した感覚である。また、万葉仮名と平仮名が併記されるのは、当時すでに万葉仮名だけでは、『万葉集』を読むことが困難になっていたことを物語っている。

2019年度「言語教育振興財団」研究助成金
一般公募のお知らせ

一般財団法人「言語教育振興財団」では、小・中・高等学校、大学、教育研究団体等を対象とし、今後の情報化・国際化・多様化の進展を踏まえ、言語教育（国語教育・外国語教育等）の充実・発展を図るために、理論と実践の分野について優れた研究開発を行う団体または個人に対して助成します。

助成内容	①言語教育の内容・方法に関するもの（教育内容・方法部門） ②言語教育教材の質的向上に関するもの（教材部門） ③教育機器を利用した言語教育の在り方に関するもの（教育機器部門）
研究期間	2019年4月～2020年3月（原則1年間）
応募資格	言語教育（国語、英語、日本語等）に関して研究開発を行う教員及び教育開発を行う小・中・高等学校・大学・教育研究団体（学校の学年・教科単位を含む）、上記に準ずると見做される団体及び個人
助成件数及び金額	助成件数は60件程度 助成金額は1件につき原則として、20万～40万円
助成金の使途	助成金の使途は、研究に直接関係するものに限ります。インフラ整備のための物品購入は対象となりません。
応募方法・締め切り	・研究開発活動についての企画書または実施した実践報告書等の参考書類を添えて、別に定める「助成金交付申請書」を、2018年12月21日（金）必着で、当財団事務局に郵送のこと。 ・「助成金交付申請書」を希望される方は、返信用切手（120円）を同封の上、当財団事務局までお申し込みください。
決定・発表・交付	2019年2月に当財団「選考会」にて選考を行い、選考結果は2019年3月末までに文書にて通知します。交付は、2019年4月末までに指定された金融機関に振り込みます。
問い合わせ先	一般財団法人言語教育振興財団 事務局 〒141-0021 東京都品川区上大崎2-19-9 TEL & FAX 03-3493-7340 E-mail:gengo-k@star.ocn.ne.jp

国語 平成31年度用教科書 訂正箇所のお知らせ

平成31年度用教科書では、平成30年度用教科書から以下の箇所を訂正いたします。校内の先生方でご確認のうえ、ご指導の際には十分ご注意くださいようお願い申し上げます。

なお、教科書の訂正に伴いまして、教科書紙面やその内容を含む各種指導書につきましても、訂正を必要とする箇所が生じます。合わせてご承知おきいただきますよう、お願い申し上げます。

学年	ページ	行など	29年度	30年度
2年	185	注⑦	⑦放送場所は、山元町役場の一階ロビーに決めた。＝二〇一一年七月の役場の引っ越しに伴って、「りんごラジオ」も役場内から、公民館の前のプレハブハウスに移動した。	⑦放送場所は、山元町役場の一階ロビーに決めた。＝二〇一一年七月の役場の引っ越しに伴って、「りんごラジオ」も役場内から、公民館の前のプレハブハウスに移動した。 <u>なお、「りんごラジオ」は、震災から六年にわたって放送を続け、二〇一七年三月三十一日に閉局した。</u>
3年	156	上15	人の姿や心のありようが実に <u>細やかに</u> 表現されている。	人の姿や心のありようが実に <u>こまやかに</u> 表現されている。



この給食、
きっと忘れない。

いつもどおりの、
けれど誰かにとっては特別な給食――
6人の中学生たちの揺れる心が、
給食をきっかけに変わっていく。
やさしく胸に響くアンサンブルストーリー。

好評発売中
給食アンサンブル
如月かずさ 作 / 五十嵐大介 絵

定価：本体950円＋税
188mm×128mm / 並製 / 192p
ISBN978-4-8138-0078-1 C8093

光村図書出版株式会社
ご注文は、お近くの書店または弊社ウェブサイトで。
www.mitsumura-tosho.co.jp

「書くこと」の 授業をつくる本

授業づくりに役立つ本、授業とからめて生徒に読ませたい本などを紹介するリレー連載。今回のご担当は、渡辺光輝先生（お茶の水女子大学附属中学校教諭）です。



お茶の水女子大学附属中学校
教諭

わた なべ こう き
渡辺光輝

1976年、千葉県生まれ。千葉大学大学院修了。共著書に『中学生を作文好きにする！新レシピ 60&ワークシート』（明治図書出版）など。

初任以来、二十年間没頭してきた「書くこと」の授業づくりについて、その発想のもととなった本とともに振り返ってみる。

■初任時代

「良い文章とは、自分にしか書けないことを、だれが読んでもわかるように書いた文章」（『高校生のための文章読本』）。これが、私の「書くこと」指導の原点だ。クラスのアさんに「しか」書けないことを探し、それを引き出すための声かけや、題材の与え方などの工夫に没頭した。毎年文集を編み、生徒と読み合い、楽しんだ。

『言語表現法講義』は、自分の文章観を形成した、思い出深い一冊。「言葉を書くことは、よりよく考えるための、自分と向かい合う経験の場なのだ」などの言葉に目を開かされた。以後、安易に生徒の文章を「添

削」することに恐れを感じるようになった。『新作文宣言』で紹介される、工業高校の作文の授業の数々からは、書くことによって、ここまで人は自由になれるんだと衝撃を受けた。

■六年目

理想的な文章だけでなく、実用的な文章を書くことのトレーニングの必要性を感じ、さまざまなジャンル、メディアでの実践にチャレンジし始めた。その発想のもととなったのが『理科系の作文技術』。この本との出会いも大きな出来事だった。

書き手に、わかりやすく伝える表現技術がなければ、その文章は独りよがりなものになってしまう。ひいては、不親切で不誠実だとさえ読み手に受け止められかねない。だから、技術を軽視してはいけない。

自分の思いをしつかり相手に届けるためには、何を学び、身につけなければいけないのか。この本をきっかけに、表現技術について、もっと考えようと思い始めた。

■十五〜二十年目（現在）

これからは、「書き手の思い」の表出という視点だけでなく、「読み手の認知の特性」まで考慮した「書くこと」の学習を模索していきたい。今、着目しているのが「テクニカルライティング」だ。マニュアル表現などで活用されているその技術は、認知心理学の分野で研究が進みつつある。つい先日、認知心理学者と一緒に「紅茶のいれ方マニュアル」の授業をつくり、生徒たちと楽しく取り組んだばかりだ。社会につながる書く力を育てるために、さまざまな知見を応用した授業を模索していきたい。



理科系の作文技術

木下是雄 著
中央公論新社／1981年

「文系の文章」を小説や随筆とするならば、「理科系の文章」とはレポートや説明文、報告書などの実用的な文章を指す。本書は、その実用的な文章に必要な作文技術を説く。アカデミックライティングの基本文献。



心理学者が教える 読ませる技術 聞かせる技術

心を動かす、わかりやすい表現のコツ
海保博之 著
講談社／2018年

筆者は「わかりやすい文章の仕組み」について認知心理学の見地から研究してきた認知表現学の第一人者。わかりやすい文章を書くために不可欠な、読み手の認知の特性に配慮した表現のコツが凝縮された1冊。



言語表現法講義

加藤典洋 著
岩波書店／1996年

批評家、加藤典洋が大学で学生を相手に指導した「言語表現法」の講義録。学生が実際に書いた文章に、加藤氏がコメントしつつ「書くことというのはどういう経験なのか」を明らかにしていく。



新作文宣言

梅田卓夫・清水良典・服部左右一・松川由博 著
筑摩書房／1996年

愛知県の工業高校の4人の国語教師が取り組んだ、「作文」の可能性を限界まで広げた実践の記録。「最初の記憶」を思い出して書く、「水の入ったコップ」をひたすら眺めて言葉で描写するなど、とにかく楽しい。

マイシャと 精霊の木

アフリカ・サバンナに生きる少年マイシャと、

精霊の木との対話形式で展開する「いのちの物語」。

医師であり、自然写真家でもある著者が、

過去60回以上ものサバンナ取材旅行を通して考えた

「いのち」の意味や、その尊さについて問いかけます。

「いのち」について、

主人公マイシャとともに考えることができ、

道徳科や総合的な学習の時間、

長期休暇時の課題図書としても最適です。

井上冬彦

文・写真



好評発売中

マイシャと精霊の木

井上冬彦 文・写真

定価：1,800円＋税 / AB判(257mm×212mm)

ISBN978-4-8138-0063-7 C0072

井上冬彦
いのちふみのこ
一九五四年東京都生まれ。
医療法人「井上胃腸内科ク
リニック」理事長・院長。
医学博士。一九八七年に初
めて東アフリカのサバンナ
を訪れて以来、サバンナの
自然と動物をテーマにした
写真撮影を行っている。

光村図書出版株式会社 ●ご注文は、お近くの書店、または弊社ウェブサイトで。 www.mitsumura-tosho.co.jp



光村図書

中学校 国語教育相談室 通巻 No.185 2018(平成30)年9月29日発行

発行人＝小泉 茂 発行所＝光村図書出版株式会社 東京都品川区上大崎2-19-9 〒141-8675 電話 03-3493-2111

www.mitsumura-tosho.co.jp E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp 印刷所＝株式会社 加藤文明社 デザイン＝mg-okada

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」にのっとり、適切な管理・保護に努めてまいります。

詳しくは、光村図書ウェブサイトをご覧ください。広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書出版までご連絡ください。